

續
近
世
畸
人
傳
二

2320

續近世畸人傳卷之二

里村紹巴



里村紹巴本姓松井氏。初〜無名中明應院
 の唱食あり。やう志あり。たゞいふまじきこと
 にも。必名を天下にをまんといひ。つねに肉桂の時宗
 乃僧ありて。さる南都のまじり。連字をさるる。の
 うりた。あれをぬじり。れそ。うら。紹巴もやうり
 本土の連歌師大東正云に。うら。め。の。む。ま。の。こ。り。
 肉桂のまじり。うら。ま。の。む。ま。の。こ。り。は。あ。ら。う。
 て。それ枝州に。うら。王侯士庶。ふ。れ。師。し。あ。ら。う。う。ら。そ。
 名天下にあまぬ。し。うら。ま。の。む。ま。の。こ。り。は。あ。ら。う。
 巴。うら。ま。の。む。ま。の。こ。り。は。あ。ら。う。う。ら。そ。

かの里村と号す。又隆仁の年ハ三條西稱名院及乃
了。西所公の御孫。平臨に齊の三宮。是ハ天竜寺の業
史乃。隆云。南都。傳ハ。おろ。あり。は。く。ぬ。け。鶴。よ。う。れ。る。
と。ゆ。い。ぬ。も。明。智。光。本。能。る。に。押。せ。事。遂。行。と。ぬ。城。今
信。志。の。ゆ。り。何。ゆ。ま。う。い。ら。ぬ。ま。う。ぬ。接。疎。う。ま。れ。ば。そ
南。漢。陽。光。院。の。宮。後陽成院の御父御即位の。小。比。乃。御。所。を。の。り。と。
城。今。ぬ。い。つ。ら。陽。光。院。宮。ハ。禁。中。ハ。遠。く。せ。ぬ。ま。事。遂。ま。れ。ば。
業。無。さ。う。く。方。從。じ。く。い。も。起。也。と。門。と。さ。
や。う。く。自。換。と。く。り。も。と。り。一。つ。み。貴。さ。し。て。は。下。位。を
賜。さ。う。思。ふ。所。な。り。と。ぬ。わ。づ。く。法。服。を。ぬ。き。り。て。い。り。
免。さ。り。て。前。を。い。ら。ぬ。の。事。置。御。を。け。り。さ。や。い。ら。ぬ。い。ら。
法。橋。の。叙。さ。り。る。豐。太。周。乃。時。よ。り。と。護。養。と。い。ひ。り。も。名

事。後。く。ま。し。枝。修。め。に。ゆ。る。者。七。人。之。親。也。一。人。之。宅。と。大。炊。御。門
堀。川。の。東。も。小。堀。入。今。も。親。也。西。と。い。ふ。大炊御門ハトを愛く。宝珠庵。と。い。ふ。け
花。類。ハ。は。考。次。乃。師。ら。る。が。乃。親。と。あ。り。三。年。さ。ら。小。堀。せ。り。れ
花。類。云。三。冊。云。中。在。る。ま。き。予。と。と。さ。り。か。池。に。教。ふ。や。て。親。也。の。子。玄。師。玄。仲
こ。の。ゆ。く。業。と。嗣。り。と。玄。師。之。生。の。蓋。將。深。ま。る。も。玄。師。乃。親
母。ハ。玄。仲。の。も。女。ま。れ。ば。そ。詳。説。と。名。く。ま。き。り。と。い。ま。ん。は。れ。ば
先。此。説。を。奉。南。都。の。一。と。又。母。の。ま。う。く。に。た。る。ま。り。次。ハ。花。類。が
ま。う。一。冊。と。掲。ぐ。わ。い。負。は。れ。乃。戴。恩。記。と。い。は。れ。る。親。也
負。は。る。親。も。ゆ。り。師。才。ハ。同。我。く。見。因。と。り。取。れ。記。さ。り。れ。ば
皆。實。事。也。と。い。ふ。人。と。さ。る。連。所。と。名。れ。同。や。一。成。り。た。ハ。百。首。遍
の。も。老。れ。奉。法。と。り。て。本。行。一。大。恩。と。い。ふ。一。終。義。江。師。と。い。ふ。人
ハ。あ。り。ら。ふ。い。く。さ。ら。と。書。と。行。て。い。え。ら。れ。ら。と。小。川。宗。叙。法。の。殿。師

陽明の
えせの流也

無善無悪心之體

りかたのつらきことありては

有善者無善之動

とてかたのつらきことありては

無善者無善之動

とてかたのつらきことありては

為善者無善之動

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

とてかたのつらきことありては

陽明の流也

六

たにちむらうりごしけりまのこむらさきくさるの二本

矣やむらうりごしけりまのこむらさきくさるの二本

えんわ平冬

希賢七十一書

及ふひとびと寛保に甲子乙未の辰と。ま
辛未の辰と。寛保に甲子乙未の辰と。ま
續按どふ。新著中養子に辨の辨。つりつらぬ名を
のまかりし。一乙の辰と。吾はに他也。
船養子辨の儒と著し。つりつらぬ名を
つりつらぬ名を

因うたむ。此おるまの清守のまじりくま
らわらる。一乙の辰と。吾はに他也。
一書院まじりつりつらぬ名を

舟のまじりつりつらぬ名を
つりつらぬ名を

松岡恕庵 附始若水

此庵は名ぬい。其言字の成章。始初種も。其後乃
神道とまじりつりつらぬ名を。平安の人。も先尾
張名漢のまじりつらぬ名を。海平國角より。其言字の成章。始初種も。其後乃
あふ。儒のまじりつらぬ名を。詩経の名と。編生若水と。
ふ。一乙の辰と。吾はに他也。つりつらぬ名を。其後乃
く。此庵は名ぬい。其言字の成章。始初種も。其後乃
本料とまじりつらぬ名を。つりつらぬ名を。其後乃
究む。其言字の成章。始初種も。其後乃
二三條とまじりつらぬ名を。つりつらぬ名を。其後乃

園書と云ふはしりたりのものなり。大桶の深さのいふは
 民のしりたりのものなり。又言はるる民の曲なりの如きは
 のりきりしりたりのものなり。麻のしりたりのもの
 ならむやりのものなり。さていふは務と云ひたれり。さるる
 是れはしりたりの仁濟先生の法席の如きはしりたりのものなり。
 えきの側よりしりたりのものなり。白く本席の務と云ふは
 妙のしりたりのものなり。海を渡るものなり。妙のしりたりのものなり。
 さりたるものなり。又あるはぬ僕と云ふはしりたりのものなり。端の席と云ふはしりたりのものなり。
 こゝの某のしりたりのものなり。さていふはしりたりのものなり。
 皆れしりたりのものなり。今やぬは端の席と云ふはしりたりのものなり。
 いらむはしりたりのものなり。さていふはしりたりのものなり。又南天の本
 のりたりのものなり。さていふはしりたりのものなり。

藤田人作

丸



又樂府奇曲のありのふくしも尤者のまふやうせしむれを
音律の音ふりて。併を填すべし。その調は情ふんむも
のあり空圓と能り。そ聲ふりて又字の填と。是て能の
しきとありそ人の心と可あふわが。昂美ふたの者よの祥
にりつるや。詩書と能。經書に系と。双聲と散と能し。
初も歴代を揚。下を平解王え美。中ぶ。そ國志がを。六
あふの者く。空却と。も音のねは。りく音の諸家皆せし。
し。そ。こ。る。ふ。は。清。摩。の。僧。文。之。さ。ま。し。ま。い。え。之。長。約。又。様。も
そ用。通。せ。能。通。作。の。た。ふ。平。以。と。も。の。と。よ。て。は。は。と。廣
し。し。い。し。わ。の。か。ん。ふ。り。と。よ。と。ま。い。く。わ。と。平。し。き。の。言。語。も
と。は。て。入。息。も。し。も。き。は。少。壯。の。白。ひ。老。れ。た。る。恐。ん。ふ。れ。と。も
た。又。華。ふ。の。子。と。也。し。の。い。は。る。の。は。い。り。ふ。も。情。と。き。は。は。り
と。老。女。ら。ふ。ま。ま。と。ん。て。故。後。の。想。と。し。い。ぬ。の。ま。
そ。老。女。ら。ふ。ま。ま。と。ん。て。故。後。の。想。と。し。い。ぬ。の。ま。
後。よ。い。は。る。の。海。と。等。と。後。志。と。ま。い。と。ん。と。お。ま。り。

詩家音律凡例小引

ハ病在五字内謂之急。在十字内謂之緩。緩急之度
謂之節奏。節奏也者。其作詩之本歟。豈啻詩已。凡百
散文儷文亦皆雙聲疊韻也耳。而今吾邑之士。絶無
講求雙聲疊韻者。余甚惜焉。故著茲編。并凡例云。

泰宇下村道瑞謹識

沈約ハ病も出されしやんらふ等と

平頭 上句第一二字與下句一二字同聲

蜂腰 第二字不得與第五字同聲

上尾 第五字与十字同聲如青青河畔州。鬱鬱園中柳是也

鶴膝 第五字不得與第十五字同聲

大韻 如聲鳴為韻上九字不得用驚頌平榮字

小韻 除本韻一字外九字不得兩字同韻如遙條

同韻也

正紐 詩病有正紐傍紐謂十字內兩字雙聲為正

紐

傍紐 若不共一紐而有雙聲為傍紐如流六為正

紐流柳為傍紐

真田三ノ角

伊豫の儒友矣田之角名の上亭を吾南蘭江と号す

古稀乃熟なるをより南の亭と稱ふ之角上亭の名
みりて。此後及信條より。小室宗正は信十郎と
そえ越前豊宗より。伊海にあり。柳田川の且よ家と
ある。そのとある。豊宗は。累々土着の一名あり。其初
より。そのとある。田園。しほよ。長教。藤洲のり。人。に。考。食。
その。とある。一。二。三。四。五。六。七。八。九。十。十一。十二。十三。十四。十五。十六。十七。十八。十九。二十。二十一。二十二。二十三。二十四。二十五。二十六。二十七。二十八。二十九。三十。三十一。三十二。三十三。三十四。三十五。三十六。三十七。三十八。三十九。四十。四十一。四十二。四十三。四十四。四十五。四十六。四十七。四十八。四十九。五十。五十一。五十二。五十三。五十四。五十五。五十六。五十七。五十八。五十九。六十。六十一。六十二。六十三。六十四。六十五。六十六。六十七。六十八。六十九。七十。七十一。七十二。七十三。七十四。七十五。七十六。七十七。七十八。七十九。八十。八十一。八十二。八十三。八十四。八十五。八十六。八十七。八十八。八十九。九十。九十一。九十二。九十三。九十四。九十五。九十六。九十七。九十八。九十九。一百。

初見見やうとるを痛ていせうけらるひ。ひつとらう。
三角亭記。暮秋をあらせうたれ獨ぐ

三角亭記

余嘗於後圃中開試馬場。長不及五十步。廣僅可旋馬。傍植花卉。外鑿芙蓉溝。內築小堤。偶記俞退翁三角亭詩曰。春無四面花。夜欠一簷雨。同話錄。花為韻。作余仁廓。余愛其句。深服其意。凡天下之花。無四時無五色。雖有躑躅。紫燕。稱四李。歲中三開耳。余家五色梅。分淺深紅。足數。何索墨梅。何貪四面。竊思三角之為物。則方之半矣。缺盈之戒。無以加焉。因欲倣之。構亭於西北隅。庶乎不妨旋馬焉。有志未果。客歲病眼折足。不堪騎乘。遂放馬。徹調馬埭。鋤為菜圃。今

春晚有人告曰。有廠材價不滿一貫文。盍安堤上也。余心搖焉。召二老僕謀之。食曰。不用。請陪其價。可辨矣。日亭午。此去神山幾里。春水方漲。編柁乘流。二人而足。余從之。薄暮果致杉材十餘根於門下。明日召匠構之。曰。務存斧鋸痕。謹勿施龍斲。不日成之。又翌日葺第。至三日落之。時三月十二日也。揭蓬窗子扁。忽官書至。飯于亭。歸于府。他日心常在此亭。七月之望。歸鄉。坐卧亭中。仰看青山。俯觀紅蕖。始償平生。因為之記云。
此及凡百乃其說三角のりれ。一奇事あり

三角亭詩

桑瓠空負四方志。三角亭中夢亦奇。忽怪蟲聲開一面。深歡月影照多時。人間交際重謙損。天道循環警

滿虧。窻自不妨。八風至。牀頭長掛退翁詩。

又

三角亭中獨煎茶。人言封閉縮如蝸。直方難處下流地。圓轉何停峻阪沙。有冰有山常可月。無冬無夏永觀花。比年患眼偏嫌白。藍紙粘窻同碧紗。

壽碣銘

與田士亨字嘉甫號蘭汀。亭曰三角。南山古稀所賜號也。小字宗四。宜休大人季。為伯龍溪嗣。服嫂堀口氏。喪十四。遊學宇治。十九上京師。事東涯先生。十一年。廿二命校名物六帖。深叶師意。爾後編述必專任焉。廿九擢津府。賜十口俸。戊午加五口。甲戌蒙命校明史。半年。旬豆竣功。癸未領百廿石。庚寅東下留柙。

邸九月。壬辰班掌鎖右。褒學術也。甲午轉中廳。賞書萬卷。與家丁卅負器械也。丙申告老。尚賜退俸十口。隔日入侍。或至夜分。所賜書畫扇巾衣裳至襦帶山積不止。等身矣。今茲己亥不幸。會嫡士元喪。忝蒙兩公存問。仍有花養賜。臣庶之家未之前聞也。時歲七十七。先嬪土井氏二男。次曰正集。冒岡部。三女長配。侄士弘。餘夭。後嬪細江氏一男曰叙典。冒吉村。內外孫十四人。婦孫七人。五十年來門生踰八百。今存百數。身後恐或溢美。自撰壽碣銘曰。起于田間。升中廳直。何以得之。稽古之力。

加々美様鳩

加々美様鳩。源光章。保鳩。甲斐國山梨郡山王佐。

一邦おしからざるの人は、廣くして家々へ。其の儀
九世の人をもとむるが、おふくが、おとむる。徳操をいしむる。
越前丸岡候あふく。はたとは、はなはな、はなはな。固辭し
けだ。は者、はなはな。はなはな。はなはな。はなはな。はなはな。
禮の儀と、おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
はなはな。はなはな。はなはな。はなはな。はなはな。はなはな。
儒者の用、おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
なはな。はなはな。はなはな。はなはな。はなはな。はなはな。
儒書の儀、はなはな。はなはな。はなはな。はなはな。はなはな。
るが、おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
より、おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。

著す。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。
おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。おとむる。



雨井・海雨

花弁流るるに名をたふし。まはりのしるしをさへしるすのまはりのま
 へいしるすまはりとてまはりのしるしをさへしるす。高きまはりの
 けいしるすまはり。あつてもまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのま
 花散るる名山持取とてまはりのしるしをさへしるす。今こころ
 とまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのま
 そまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのま
 のまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのま
 教日。まはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのま
 ねまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのま
 せまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのま
 へまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのまはりのま

つとを願紀と。岡田よりいふ。昔人よむのつとを願紀と見
る。もういふ止事とつとを願紀と。つとを願紀と見
る。つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。

其洲庵社に

其洲庵社にいへり。源能治をぬく。つとを願紀と見。

けり。退隱する。つとを願紀と見。

つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。
つとを願紀と見。つとを願紀と見。つとを願紀と見。

洲野新水

播磨加古郡別府村の人。洲野新水。別号。つとを願紀と見。

石船七艘しるほの豪富なれども遊蕩のた
 めに費し多し後の貧乏よりぬき得ず飲み
 酒あつたわが罪深多し酒中侯初と暇略一初と稱し
 くるは。親らぐは流とあつて。領地と巡覽の
 せいぞろい。宅ふ。いとさめぬ。まよひびと。親らぐは
 みる。不興して帰城し。まぬ。三つと。孫。か。り。し。ふ
 いた。と。ふ。そ。夜。月。ら。ふ。の。ま。り。の。頃。磨。の。地。の
 ゆう。と。て。何。年。を。く。ま。り。し。り。又。出。村。る。ふ。り
 の。橋。を。は。る。と。一。際。と。一。は。る。と。そ。わ。り。の。農
 の。ま。り。の。え。か。れ。ば。お。も。ろ。し。と。あ。り。の。け。ん。と。せ
 一。の。け。は。長。さ。う。懐。の。餅。と。食。ひ。て。ま。り。と。え
 系。ま。り。は。そ。貧。乏。と。憐。れ。む。如。流。と。い。ふ。画。通。保。傳。印

叔十張の画とあつて。もしも發句と起てくふ。解り
 ぬ。許。多。の。利。を。得。り。と。お。も。ろ。し。と。あ。り。の。け。ん。と。せ
 一。と。ま。り。の。え。か。れ。ば。お。も。ろ。し。と。あ。り。の。け。ん。と。せ
 一。の。け。は。長。さ。う。懐。の。餅。と。食。ひ。て。ま。り。と。え
 系。ま。り。は。そ。貧。乏。と。憐。れ。む。如。流。と。い。ふ。画。通。保。傳。印

ありきと家へる。消一岸も袖味。なけり。腰のし入
 賜し。中。句。名。の。ま。り。の。え。か。れ。ば。お。も。ろ。し。と。あ。り。の。け。ん。と。せ
 一。の。け。は。長。さ。う。懐。の。餅。と。食。ひ。て。ま。り。と。え
 系。ま。り。は。そ。貧。乏。と。憐。れ。む。如。流。と。い。ふ。画。通。保。傳。印

大坂のきさの若遊女か
 母の妻一暮し
 名のまりのえかればおもしろしとありのけんとせ

後河の白強和尚
美ありの白の
 達磨号者背而の
あふ
 来り也くくつよまの痛くやびのつかりん休えき
 とす 乃今ちるくまて

七十六七げりりみくねわりのぞ
 七十六七げりりみくねわりのぞ
 七十六七げりりみくねわりのぞ

正因

正因高森氏号寂康。本肥後国河森大宮月三家乃
河森村と云森
と云森村と云森
 内 又佛宗の帰し。バカを若くして一切絶と
 調りしを其く京原なる道定河の舟中にて泉
 涌寺中未迎院と云相見し。云願と云院を成して

乃の吾院は高森と云。や流してあふる。三年
 乃の園藏の教と果ては。みく通く信ん御道本町
 店をしの専ら医術と絶く。技めふら。其一といふ
 大和 高取侯の松の應じて。りし。つ。も半きれ。終
 りぬ。みく。ふ。ぬ。あり。も。遠く。ま。つ。し。空
 いき。清體。し。も。一。診。し。ゆ。き。ん。と。ら。ま。て。診。て。曰。猶
 くる。ふ。り。の。や。ま。り。と。薬。と。進。り。ふ。忽。換。息。し。終。り。と
 せん。け。教。れ。ま。ん。た。よ。ま。ん。行。る。よ。り。や。り。團。歌。と
 こ。め。じ。時。ふ

靈元上皇。仙洞よ人麿の社と造りせ給んとして。あま
 しく石像と云きせ給つ。正因藏なる所の像阿婆
 しく傳来する公奉りし。甚敷意は慍いしとて

許多令及び下町の宅跡并庵の祖と魁せられ
新醫人なるともく。まゝく大己貴命の家の
衣箱を賜ふ。祖よは服し之進む。且和歌と著し
版圖の達しをわたり。某師の傳奏し。自詠二十首と
あると。甚辛たむや。東菴寺の号と賜ふ
らり。とて書院乃名を授。凡生佛の業巻りの
あやしといへり。あは不抱し。てさうも。齋食は
樹ら。くよりをら。つるあも。多歎の肉とむらひ。教
せに。あつらふと。をせ。安永傳鑑の旨よ。勝五
教。と。薬と製し。病者。な。た。あ。善業人の
に。ふ。あり。七旬存。病る。自死日と。あり。
陰服を。着し。端座し。と。遊。醫術の。書。は

て家よ傳し。一せ。不。れ。久。く。あ。れ。は。ま。み。く。素。和奇集

の。一。日。中。り。し。い。ま。ま。大。の。こ。め。た。せ。び。う。る。か。ゆる。り
の。く。乃。書。集。う。る。が。あ。り。と。ま。ち。中。に。あ。り。と。著。ぐ
早春　ま。れ。の。雪。ま。く。あ。ま。村。の。せ。え。ん。ん。ん。の。せ。の。り。け。ら
あ。た　は。ま。の。め。り。と。あ。り。ん。ん。ん。ひ。が。氷。の。た。り。と。さ。る
山家月　ま。の。ま。の。の。あ。ら。は。の。れ。ん。は。ん。は。ん。の。り。せ。ら。ら。中。の。り
お。當。ま。と。は。ま。の。た。い。ん。ん。ん。ん。の。り。め。り。と。あ。り。と。著。ぐ
不。定。識　う。ら。の。れ。の。園。と。あ。り。と。今。は。の。あ。り。と。あ。り。と。あ。り。と。あ。り
道場　よ。ら。の。れ。の。り。と。あ。り。と。あ。り。と。あ。り。と。あ。り。と。あ。り。と。あ。り
あ。ま。の。り。と。あ。り。と

端文仲

氏家伯耆

端海字文仲通名順助春莊と号す。書林をりしうで。
隠保ふくく詩と能て名あり。天師の火よりひて人
冬為のふくく詩と能て名あり。天師の火よりひて人
緒名家をもてさうさしり。此はのまが前莊をりたるのりり。
教ふ集の家乃國とさうさしり。此はのまが前莊をりたるのりり。
これ他被北乃首にさうさしり。

半用全盛競春光
酒館任招僧院詢
人情一月為花忙

又

偷閑半日惜芳菲

烟帳蒼前復友非

醉後縱能紅照面

時々作雪鬢邊飛

六より久き年い人と情ぶるた。おと男て次其絶す

詞類曰

文仲戊申罹災家産蕩尽。尋復得疾其病中五
秋詩曰。因接林鐘暑更熾。上蒸下濕瘧瘟并。
間芻具醫調護。棺後詩名天寵榮。老荏引雛窮

巷寂新筮灑月。敗簾清。五更行雨支。金吹。秋月

白川水北生。作此詩後遂不復起。終為絕業。

先廬委殯。葬彼嶺。銷莫賃居貧病并。

一盞粮支百核卜。數篇詩歌五侯榮。

舟移夜壑令何促。墓傍青山骨亦清。

得句猶思來質我。每逢風景感逾生。

上人未句自註曰。生每得詩。或有推敲未德者。輒
未謝之。余曰。其字可。其意別。彼。余。會。當。不
不置。善。於。色。羞。不。稱。羞。則。死。也。不。德。也。不。會。
微。然。擲。句。曰。解。字。尚。勝。也。其。真。率。羞。此。定。遊。

中能有善人乎。此事今尚待來于神中土也

○九齡字伯壽。蓋山人。不姓。加藤。近江。依木山。乃蘇。法。名。邑。の。人。詩。と。ぬ。り。亦。と。も。嗜。む。若。く。して。家。産。小。少。ふ。由。急。家。中。に。業。を。終。り。化。邦。ふ。あ。り。後。京。師。氏。家。神。國。さ。り。母。あ。れ。孫。あ。り。た。り。て。そ。の。女。を。解。し。そ。家。を。終。り。神。國。の。醫。人。と。多。能。く。あ。り。流。の。事。と。も。い。ふ。人。ま。り。伯。壽。の。漢。字。と。教。授。し。も。と。も。寺。と。も。習。ふ。也。も。と。も。い。ふ。人。所。謂。乃。詩。奇。と。て。も。さ。り。と。教。授。さ。る。と。致。し。ぬ。也。い。ふ。人。け。つ。ら。に。集。る。もの。も。そ。二。三。首。た。ふ。等。く。性。執。造。り。顔。を。且。古。詩。と。説。話。と。る。と。ゆ。い。ふ。人。と。絶。倒。す。也。明。年。ふ。は。日。陽。明。乃。字。と。信。し。たり。京。師。中。あ。り。て。や。名。と。ま。り。し。斗。と。い。ふ。く。く。病。に。致。す。と。い。ふ。也。い。ふ。人。

池田湖二首

萬頃煙波涵大清。琵琶何歲作湖名。園存石鹿皇都跡。藩壯金龜侯國城。諸島爭奇盤上峙。千山浸秀鏡中平。滔滔八百余川水。向此朝宗日夜聲。西北名山數十峰。巍然紫翠畫中濃。風前吟鳳笙。洲竹。磯上卧龍蓋。館松。天接中流涵日月。地開東海吐芙蓉。丈夫不識名區壯。宇宙何由披曠覽。

寄東適禪師

高僧丈室倚岩巖。千仞機鋒透碧宵。講法臺前馴猛虎。參禪會上斬兒猫。寒溪明月敲氷汲。暮嶺白雲分雪樵。久抱煙霞負蓮社。思師永夜夢魂遙。

明妃曲

漢書卷九十四

四十一

朝暮換不可勝狀。甚尔一團黝席。僅函丈而氣象百
 千盡。在几席間。不亦奇乎。法師既多。四方交遊。戶外
 之屢。未免雜速。則今之所營。唯同調者。而得以下榻
 云。乃得余。謂曰。某老矣。不復從運東西。此其臥而遊
 之乎。願某所宗。猷穢而欣淨。是誠何心哉。師其村度
 而命之。余曰。有是哉。其惟泊乎。夫泊也者。寄身一葉
 之。上下無所定。四維無所亞。必也知其所以止而後止
 焉。然目不得視。耳不得聽。彼寒山之鐘。江楓之
 火。亦無所待。而有所待者也。經不言乎。見聞如幻。豈
 三界如旅泊。故見而歸之。是謂不見之見。聞而幻之。
 是謂不聞之聞。及界出界。方便之門。其在茲與。君豈
 所待是舍諸。且夫華頂禪林。黑谷者。皆君所宗。宗而

之。此所以羹牆于旦暮乎。昔者吾正覺國師。居相
 之三浦。名庵曰泊船。聞芭蕉翁。寓武之深川。亦有泊
 船之堂。是猶有繫乎水。與船者也。今法師之營。非水
 而山。不船而泊。泊之時。義於甚遠矣哉。法師曰。善哉
 請記斯言。勿忘

天明丁未十一月 淡海竺常撰

泊菴本為朋簪而設。既而以謂樹下塚間。非敢所望。
 降此。則一把之茅。猶為有餘。豈可看長物乎。遂乃捐
 之。移於歸白道院。替為佛室。畧無顧惜念。於是泊菴
 之為泊。名實念。翻為即大典。禪師所念。為得其真
 矣。唐詩有之。微然一夜風吹去。只在蘆花淺水邊。法

